

平成 19 年 10 月 6 日

北関東フォーラム

於：シムックス

## 中斎塾 北関東フォーラム 第 6 回講話

今日は、山田方谷『理財論』をテーマに申します。

では、いつものように質問を致します。

「10 月に入ってから嘘をつかなかった方、手を挙げて下さい。」

(・・・半数手が挙がる)

なかなか嘘をつかないというのは難しいことですが、もう少し手が挙がると嬉しいですね。

これは人様に対して嘘をつかないというだけでなく、自分自身の心にも嘘をつかないことが肝心です。

先日の北の湖理事長の記者会見を見ましたが、人相が悪かったですね。

あれだけ人相が悪いのは、自分自身の心に嘘をつきながら発表しているように感じました。

潔く理事長を辞任すればよいものを、自分の心に嘘をつきながら、理事長職にしがみついているようとするから、あれだけ悪相になったと思います。

嘘をつく人生は、だんだん人相が悪くなってしまいます。

私の大好きな言葉のもう一つ、「利によりて行えば、怨み多し」をご説明致します。

先ほどの続きで、北の湖理事長の話をお願いします。

「相撲協会は自主的判断で、給料の 50%カットをした」と記者会見で言っていました。

「利によりて行えば、怨み多し」という判断基準から見て、又、国技といわれる相撲協会全体から見て、北の湖理事長の判断・行動は、合格でしょうか。

では、不合格でしょうか？

(・・・沢山手が挙がる)

人の事に対しては、どなたも賢明な判断をされますね。

自分の事になると、なかなか賢明な判断が出来ません。

仮に、北の湖理事長が辞表を出し理事も全員降りて、新しい理事を選んで、「相撲協会は全面的にやり直しをします。新しい相撲協会を作りたいと思います」と会見したならば、

国民の受け止め方は大分違うと思います。

なぜ、そういう事をしないのか。

結局、自分自身の保身、目の前の利益を判断基準のベースにおいているから、どうしても自分に甘いことが起きてしまうわけです。

本日の心に残る言葉は『理財論』です。

**「それ善く天下の事を制する者は事の外に立ちて事の内に屈せず。而るにいまの理財者は悉く財の内に屈す。」**

山田方谷の『理財論』第一条を読みながら、解説致します。

山田方谷の生きた江戸から明治に移り変わる時代と、今の時代を意識的に混ぜて解説いたしますので、より分けてお考え下さい。

理財の密なること、今日より密なるはなし。而るに邦家の窮するは、今日より窮するはなし。吠畝の税、山海の入、関市舟車畜産の利、毫糸必ず増す。吏士の俸、貢賦の供、祭祀賓客輿馬宮室の費、錙銖必ず減ず。理財の密なることかくの如く、且つ之を行ふこと数十年、而るに邦家の窮するはますます救ふべからず。府庫は洞然、積債は山の如し。豈に其の智未だ足らざるか、其の術未だ巧みならざるか、そもそもいはゆる密はなほ疎か。みな非なり。

儲けたい、税金を沢山掻き集めたい、自分の利権を多くしたい・・・そう思って必死に行動している国民や官吏の多い国は日本です。

今の時代ほど、拝金主義がひどく蔓延している時代はない。

それなのに今の日本の困窮度合いは、歴史的にみても非常に酷い状況に陥っている。

日本の歴史上、これほど過酷な税金を課している時はない。

国の収入を増やしたいと考えて、考えられる税金は何でもかんでも取ろうとしている。

それは国家だけではなく、自治体も同じである。

収入を増やそうとして税金を滅茶苦茶に増やしているけれども、支出を減らさなければいけないではないか。

役人の給料を減らし、接待交際費や慶弔費、交通費や諸雑費に至るまで削るように努力をするけれども、いっこうに日本の国の財政状態は良くなるらない。

金庫は空で、借金は山のようにになって、今にも押し潰されそうである。

このような状況になるのは、担当者の知恵が足りないのか、税金の取り方が足りないの

か、原因は何なのだろうか。

努力が足りないからではなく、基本的な理念・哲学が間違っているから手法が間違っているのだ。

ちなみに『理財論』は、具体的な事実の裏付けがあります。

備中松山藩（今の岡山県）の収入は、公称は5万石ですが、実態は19,300石と言われています。

今のお金に直すと、約年収20億円です。

年収20億の時に、借金がその5倍の100億円ありました。

普通、年商の倍の借金があったら会社は立ち行かなくなります。

話が飛びますが、それは国も同じです。

日本の国のGDPは500兆と言われます。

借金は1200兆です。

年商の倍以上の借金がありますから、日本の国は立ち行かなくなるのが当たり前なのですが、まだ生きています。

ちなみにアルゼンチンやロシア、ペルーといった最近経済破綻を起こした国は、GDPの半分以下の借金で国家破産をしています。

日本は、この状態で経済破綻をしていない、非常に珍しい例なのです。

松山藩が20億の売上げで借金が100億円という状況が分かったのは、山田方谷が藩の大蔵大臣になって調べてからです。

破産していなければおかしいような状況をどうすればよいか。

方谷が実行した改革は「入るを図りて、出るを制する」という非常にオーソドックスな方法でした。

まず、「出づるを制する」を先にしました。

山田方谷が最初にしたのは、情報公開です。

自分の家庭に他人を入れて、自分の家計を公開し始めました。

大蔵大臣が先頭切ってやり始めましたので、本気だという事が伝わったわけです。

それから給料を大幅カットし、食べ物を一汁一菜にしました。

領民のみならず、役人もお殿様も例外ではありません。

「出づるを制する」の最大のものは、借金の棚上げです。

100億円の借金を長期返済に切り替えて貰い、更に担保として入れてあった米を全部返し

て貰いました。

そのお米を松山藩に送って、義倉所を作って蓄え、飢饉が発生した時には領民に配るという事を公約しました。

又、大赤字を生んでいた大阪の蔵屋敷も廃止しました。

次に、「入るを図りて」については何をしたか。

まず将来を見据えて河川の改修工事を行いました。

そういった公共事業で、領民に収入の道を開きました。

鉱山を直営し、砂鉄が取れましたから、鋤や鍬の鉄製品を作って、それを船に乗せて江戸に直接売りに行きました。

これはべらぼうな利益が上がりました。

他所の藩で売れるような新たな農産物を作ったり、従来の産物のブランド化を進めました。

又、治安の取締りを徹底させ、松山藩としての軍備もしました。

「里正隊」と言って、農民を集めて洋式鉄砲を持ってもらい、洋式の軍隊を作りました。

これが明治維新の奇兵隊のさきがけになったと言われています。

それから山田方谷の財政改革で目を引くのは、藩札です。

信用のなくなっていた藩札を集めて、河原に山のように積み上げて燃やしてしまうというパフォーマンスをしました。

その後、裏付けのある藩札を出すと公表して、実際にそれを実行しました。

すると藩札に対する信用が回復し、他所の藩にも使えるように広がっていったわけです。

以上のような手を打って行って、山田方谷は 100 億円の借金を 8 年間で返済し、同時に 100 億円の蓄財をしました。

本日の言葉は、この山田方谷の「**事の外に立ちて事の内に屈せず**」です。

8 年間で合計 200 億を作った山田方谷のベースになった言葉です。

何か大きな問題が起きたら、必ずその問題の中から一步外に出て、客観的にみる習慣をつけると良いという意味です。

中に入り込んでしまうと訳が分からなくなって、打つ手が見当たらなくなります。

例えば倒産や自己破産といった運命に見舞われた時、その中でどっぷり浸かって「どうしよう、こうしよう」と考えることも必要ですが、同時に一步その渦から出て、客観的にものを見る事が肝心です。

客観的に見るには、本質・大局・歴史の観点で見ると、自分が何をすればよいかすつき

り見えてきます。

更に「**而るにいまの理財者は悉く財の内に屈す**」とありますが、今の日本の国でいえば、経済界の人達、特に国家の経済を預かる官僚の人達はすべて、どのように国民から税金を収奪するかばかり考えているから、結果として押し潰されてどうにもならなくなってしまうのです。

一番肝心なのは考え方です。

考え方を改めない限り、いくらお金を集めてきても、横領・腐敗・賄賂の世の中であって財政が立ち直ることはあり得ない。

そういう事が『理財論』に書かれています。

では、初めての方がおられますので、改めて中斎塾フォーラムの目的を申します。

先ほども申しましたように、相撲協会から始まって、今の世の中どこか緩んでいる。

歪んで、おかしい社会になっていると思います。

その根っこにあるのは、「もっと欲しい」「もっと欲しい」というあくなき欲求の繰り返しです。

「もっともっと・・・」の繰り返しでいったら、何処かで壁にぶつかって、会社であれば倒産し国家であれば破産をする事が目に見えているし、歴史がそれを証明しています。

尚且つ怖いのは、地球上の歴史の中で、人間だけが特別な種になっていることです。

バクテリアから始まって、もの凄い数の動物・植物・鉱物が地球上に誕生したけれども、それらは皆、循環をしています。

動物・植物の生命が尽きると、亡骸はその次の動植物のエネルギー源に変わるように、どんどん循環しています。

鉱物も同じです。

地球上における動物・植物・鉱物は皆、すべてリサイクルをしています。人間が作り出したもののみ、リサイクルが出来ないものが生まれてしまったのです。

その結果として今、地球温暖化が問題になっています。

地球上の大絶滅期は過去 5 回あったそうですが、今は第 6 回目の大絶滅期に入っているという認識で、西洋の科学者は一致しているそうです。

これらは前回のフォーラムでもご紹介しましたが、エリザベス・サトゥリスさんという未来学者を中心としたディスカッションに参加して、お聞きしました。

しかも、第六の絶滅期の引き金を引いたのは人類である。

従って人類が今の生き方、考え方を改めることによって、そのスイッチを凍結することが可能かもしれない。

際どい、ギリギリの所に来ているという認識でした。

では、どうすれば生き方や考え方を改めることができるのか・・・。

私は「足るを知る」という考え方ではないかと思えます。

何でもかんでも欲をかかないでほどほどにしておこう、という日本人の古来から持っている考え方です。

日本には「おかげさまで」「もったいない」といった言葉があります。

これらをもっと家庭の中や会社の中、地域の中で使いましょう。

「足るを知る心」が日本の中に広がって行って、そして世界の国々にそういう考え方が紹介できればよいのではないかと思っています。

言葉は違うけれども、同じ事を考えている人達が全世界で見れば、もの凄いな数の方達がいるはずですよ。

それをネットワークで手を取り合っていく。

「ほどほどにしておこう」「これ以上欲しがらない」「こころ辺で・・・」という考え方が広がっていくことによって、地球温暖化にもストップをかけることができると思っています。

日本政府が今出しているCO<sub>2</sub>の削減目標は、非常に甘い提案です。

もっと厳しい提案が出せるような政府にしなければいけない。

あちこちに配慮して、柔らかく誰でも呑めるようなものにしてしまったわけです。

しかし我々は、苦い薬を飲まなければいけません。

中斎塾フォーラムは、まず身近で「嘘をつかない」生き方をしましょう。

それから「利によりて行なえば、怨み多し」で、目先の欲に走ってパクッと目の前の仕事に飛びつかない。

自分が優位だからといって、あまり人様を痛めつけるものではない。

ほどほどにしておこう・・・

こういった考え方を中斎塾フォーラムで勉強し、日常の活動の中で実践し、それを来年の1月26日に年次大会を開いて、世の中に提言をしていこうと考えています。

年次大会では「知足」という運動があることを、世の中に周知徹底せしめていきたい。

そして世界に広げていく動きにつなげていきたいと願っています。

その結果として、できれば人類が生き延びる運動の一助になりたいと思っています。

ちなみに中斎塾の顧問の木内孝さんについてお話し致します。

イギリスでブレア首相が当時の安倍首相に環境問題について質問したところ、安倍さんはまともな返答ができなかったと聞きます。

イギリスの新聞では「日本の首相の環境問題に関する知識は、イギリスの小学生以下の知識しかない」と叩いたそうです。

恥ずかしい話です。

それでイギリスの議会は、日本の環境問題についてきちんとした話のできる人間を呼びたいという事で、木内孝さんが呼ばれました。

250人くらいの議員さんの前で、＜日本の政府と企業の環境問題への対応＞について講演をして来られました。

木内さんは講演の最後に、

「日本の環境問題に対して、心配する必要はありません。我々日本民族は＜知足＞という考え方を根底に持っておりますので、知足という考え方が、日本民族の根底にある限り、環境問題は解決致します。ご安心下さい。」という内容で締め括ったそうです。

日本では、皇室の影響は大なるものがあります。

皇室から「知足」という言葉が出てくると、中斎塾フォーラムで進めている知足の実践にスポットが当たると思います。

どうぞ皆さんも「足るを知る」「おかげさまで」「ほどほど」といった言葉を見直しして戴いて、自分自身のものにして、実践して戴けると有難いと存じます。

以上、中斎塾フォーラムの目的と現在やっていることについて申しました。

有難うございました。